

川田熊太郎博士追悼

川田熊太郎博士を偲ぶ

一、生涯および活動

川田熊太郎 一八八九・三・一五—一九八一・四・一（明治32—昭和56）哲学者。香川県に生れる。一九一六年香川県立高松中学校を卒業し、京都の第三高等学校第一部丙類に入学した。一九一九年、東京大学法学部に入学し、一九二二年同学部法律学科を卒業した。そのころ哲学を研究したいとの関心が高まり、同年、東京帝国大学文学部に入学し、一九二五年同学部哲学科を卒業し、直ちに同大学大学院に入る。一九二七年日本女子大学教授に就任し、西洋哲学、特にプラトンの研究に専念した。一九四〇年には『プラトン弁証法の研究』（河出書房）の大著を刊行し、一九四一年には文学博士の学位を授与された。同年東京文理科大学助教授に、一九四三年には同大学教授に任ぜられた。一九五〇年東京大学教

中村 元

授に任ぜられ、一九五九年停年退職に至るまで、教養学部勤務し、比較文学比較文化の課程で比較哲学を講義し指導した。東京大学退職後は一九五九年に駒沢大学教授に就任し、停年退職とともに駒沢大学名誉教授の称号を授与された。わが国における比較哲学研究の草創者であり、学は東西古今にわたっていた。比較思想学会設立に積極的に参加し、同学会顧問として大局から指導した。その大きな蔵書は、法制上財団法人東方研究会を経て、大正大学西洋哲学研究室に寄託され、ひろく世の研究者のために開放されている。夫人は心理学者・松本亦太郎の息女。

かれは、浄土真宗と真言宗の盛んな香川県に育ったためにその影響を受けることが深かった。「著者は早くより儒教に飽足らざる所ありて仏典に親しみ、仏教とショーペンハウエルとの関係よりして、後者を読みカントへ導かれ、同時にまたプラトンを教

えられた。」と述懐している。（『プラトン弁証法の研究』序）

ギリシア哲学を研究した成果として『ギリシア哲学研究』（河出書房、一九四六）という論文集も戦後に刊行されているが、その研究の金字塔は名著『プラトン弁証法の研究』（前掲）である。

著者はヨーロッパにおける先学の業績を尊重しつつも、自分自身の自由なる立場から研究した。その趣意は「哲学的にプラトンを解釈する近世乃至現代のプラトン研究者達が知って又識らずして受けたる拘束、即ち近世乃至現代の哲学体系または哲学思想によりてプラトンを解釈するの弊を捨離」しようとしたものである。すなわち「プラトンを古代へ還し、そうして古代に於て彼を把握した」のである。

戦後にかれは比較哲学的研究に専念した。

『倫理学』（世界書院、一九五〇）においては、一般的に倫理思想は知性の徳と人倫の徳の体系化であるとして、古代ギリシアの愛知者たち、キリスト教哲学、カント及びヘーゲル、世間、儒家及び道家、知見の哲学（仏教）とについて、倫理思想の諸体系を論じている。倫理思想体系の学としては、最初の試みであろう。

『仏教と哲学』（平楽寺書店、一九五七）においては仏教は宗教であるかどうかを問題とし、仏典においては「宗」と「教」とが別の意味で用いられ、「宗」とは説き明かされる真理（道理）であり、「教」とはそれを人々のために説き明かすことばであり、したがって仏教は religion とは異なって「宗の教」であるという

ことを明らかにし、西洋における religion との差異を闡明した。

「宗教」の意義究明に対応して、「哲学とは何か」という問題追究は『哲学要論』（東京大学出版会、一九五八年六月）のうちに克明に追究され、種々多様な哲学体系の成立する所以を考察している。

つづいて『哲学とは何か』（至文堂、一九六二）においては、さらに発展を示している。「哲学する事の根底に於て活動している所の方法は、先ず比較し、それから選択し、更に比較し問答し続けて、選取せられたものを発展せしめることである」（序）と言って、ヨーロッパ哲学、仏教哲学、ウパニシャッド哲学について、存在、生成、真理、諸学名の視点から「比較哲学の考察」を述べている。

東西の哲学原典を原語で読んで立論できる人として、かれは全くユニークであった。その研究は多分に文献に即したものであった。自分自身の体系を立てて議論を進めるというよりは、むしろ東西のそれぞれの思想体系の特徴を広い視野から見て適切に位置づけるというところに、かれの学的立場が見られる。

著書 上述のものほかに、『哲学小論集』（一九四八）という著書、『無の思想の系統論的研究』という論文（『仏教思想論集』1三省堂、一九四八）などがあり、『西洋哲学史』（東京大学出版会、一九五五）の古代中世の部分を執筆している。逝去の年に至るまで論文執筆をつづけていたが、最晩年の諸論文はまだ著書にはおさ

められていない。なおかれの還暦を記念して、川田熊太郎監修・中村元編集『華嚴思想』（法蔵館、一九六〇）が刊行されたが、それは当時新進の仏教学者たちの寄稿になり、かれは仏教学者たちのあいだでも信望を得ていたことを示す。そこにおさめた村上俊江の論文『ライプニッツ氏ト華嚴宗』は明治二十九年の東京帝国大学卒業論文であるが、ライプニッツと華嚴との関係を論じたものとしては、今までに唯一のものであろう。

二、憶い出

『プラトン弁証法の研究』で盛名を馳せておられた川田熊太郎博士が、なぜ仏教の研究を始めたのか、わたしには解らぬ不思議なことであった。

初めて会ったのが、いつのことであるか、わたしははっきりとは覚えていない。敗戦直後には、まだ大学の授業も開始されない状態であったが、川田博士は東大に用件がある序でに私の研究室を訪ねられ、度々会っているうちに、わたくしも上野毛のお宅にお訪ねするようになったのを記憶している。

そうして交友が始まったときには、川田さんのうちには、仏教に対する向学心がすでに芽生えていたのである。そうでなければ、わたくしなどには用が無いはずである。

川田さんにとって仏教が大きな問題となっていたのは、その育たれた土地の精神的風土が大きく物を言っていると思われる。

その生家は代々の宗教としては浄土真宗を奉じておられたが、姉上の嫁がれた家は真言宗の信仰であったため、少年のころに姉上から『般若心経』の口誦を教えられたという。

自伝的随筆のなかで、

この事実は、却って、私の幼少時代の土地の宗教事情をよく示している。そこには真言宗と浄土真宗または浄土真宗とが深く根をおろしていたのである。

と言われる。この精神的風土の状況を、わたくしも血肉による理解としてよく体験している。わたくしの父の実家は、讃岐の財田町にあったので、讃岐を支配していた宗教は、弘法大師に由来する真言宗であるか、あるいは浄土真宗であるか、ということを知人との交友を通じて経験して来たのであった。

この精神的風土は、川田さんに対して決定的な支配的影響を及ぼした。

姉に教えられた「心経」は絶えず心にかかっていた、それが何であるかを知りたかった。あるとき、偶然に、大内青巒の『般若心経講義』（講演の筆記の通俗版）を本屋の店頭で見つけた。代価も幸に安くあったので、喜んで買った。そして読んだ。しかし遂に何ともわからなかった。

「何のことだか解らなかった」にしても、仏教は川田さんの心を捉えて離さなかった。

真言宗も浄土宗も浄土真宗も共にふり思である。その

空気を吸い込みながら生長した私にも、絶えずさまざまな問いがおこった。そして、それらは「仏教とは何か」という問いに集約せられるものであった。

伝統的な仏教の解説では、仏教を理解することができない。合理的に理解するためには、合理的の思惟を経由しなければならぬ。そこで川田さんのとった道は、西洋人の理解を媒介とすることである。

その頃、誰からともなく聞いたのは、シュウペンハウエルを読めば仏教がわかるということであった。それより、やや後になってドイツ語がいくらかわかるように成ってから、幸いに入手した『意志と表象としての世界』（レクナム版）を苦心して読み、著者の思想を知るとともに、ドイツ語の力もつけてもらった。其処にはカント哲学があり、当時の生物学があり、プラトンのイデア論があり、ウパニシャド哲学や仏教の「涅槃」があった。

ところがこれが機縁となつて、川田さんは西洋哲学の研究のほうへ入って行かれたのである。

しかし、それによつて私は仏教へ近接しえたとも、彼（著者註、『シュウペンハウエル』）によつて仏教をわからして貰ったとも考えられなかった。そして私の注意は彼を通じて、むしろ、プラトンやカントを生み出したヨーロッパ哲学へ向けられた。

むしろ仏教を研究したいという熱意を捨て去つたのではない。『しかし仏教を原典から読む力をつける閑暇を持つことは許されなかった。』

やがて、大東亜戦争、太平洋戦争が起り、大学で講義などしておれる場合ではなかった。講義は停止された。ところが川田さんはこの逆縁を順縁と化したのである。自分で研究を進めるための良い機会とした。サンスクリット語の文法書と辞書とを購入して、仏典を原文から読むことを開始した。わが国における西洋哲学の諸教授のうちで、サンスクリットの仏典を原文で読んだ人は、恐らく川田さんが最初であろう。

この手づきによつて、川田さんは西洋哲学をも仏教をもそれぞれ適当な位置づけにおいて理解するに至つた。

かくて私は、一方においてヨーロッパ哲学を研究しながらも、他方においては仏教経典を原語から学ぶことに努めたのである。この間に私はシュウペンハウエルを尊敬しながらも、次第に彼から離れた。そしてヨーロッパ哲学を仏教化するのでもなく、仏教をヨーロッパ哲学化するのでもなくて、それぞれをそれぞれ自体として見極めようと努力した。また今も努力しているのである。

と、逝去の六年前にこの感想を述べている。たしかに、川田さんの学風は、独自の体系というよりも、むしろ思想の個別的特徴の明示叙述のほうに重点が置かれていたように思う。

川田博士の功績は大きくて、一々数え立てるのも困難であるが、一つの注目すべき貢献は《宗教》の意義を明らかにしたことである。

川田さんは仏教の真精神というものを開明しようという希望をもっておられたようである。

ここにも仏道を旅する者にとっての新しい課題がある。この課題を解決するためにも、このような復原せられた仏教が言われる必要があるのではなからうか。

と、自伝的回想を結んでいる。

川田さんは、慈雲尊者から、さらに遡って浄嚴律師について非常な興味をもたれ、その事蹟について知り得たことを、喜悅満面の表情をもって、わたしに語っておられた。これは、原典に遡って探求したい、というその願望が、これらの先覚者たちを尊敬し憧れるという気持を起させたのであろう。

川田さんの晩年には、わたくしも忙しく、若いときのようにしなばしおつき合ひもできず、とかくご無沙汰がちであったが、しかし遠いところから見守り、見詰めておられたようである。わたくしが東大を定年退職し、財団法人東方研究会をつくって若い人々とともに進みたい、という旨の挨拶状を諸方へとどけたところ、川田さんから御返信あり、

「あなたは、とうとう筋を通しましたね。」
と一言書いてあった。

川田博士は非常な蔵書家で、また愛書家であった。書物の保存には非常に気を使っておられた。書物を書庫の中にながくおいておくと、どうしても湿気を帯び、臭気を発するので、どうしたらよいか、川田さんの教示をもとめたことがある。それに対して「そのためには気をつけて度々書庫の窓や戸口を開けておけばよいですよ」と答えられた。何でもないので、確かにそのとおりであるが、とかくなおざりにしがちなわたくしにとっては確かに頂門の一針であった。

「わたしが死んで、蔵書を《川田文庫》としてどこかで保存される場合には……」というようなことを、何気なく洩らされたことがある。ついにその時機が来てしまったのである。

令息・川田純氏（徳島大学教授、薬学）が或る日わたくしを訪ねて申し出られた。「父の蔵書は、西洋哲学と東洋哲学と両方にまたがっているのので、それを分断しないで、どこか一ヶ所に納め、ひろく世の比較哲学研究者に利用してもらいたい」とのことであった。そこで比較思想学会の人々とも相談し、法制上、東方研究会（わたくしの主宰する財団法人）を経て、比較思想学会の事務局のある大正大学の西洋哲学研究室に寄託され、比較思想研究のために役立つように設置されることになった。

（1）川田氏には「旅人（たびびと）」という自伝的回想文がある。『女性仏教』第二十巻第四号（昭和五十年）に掲載。これは末木剛博氏所持の抜刷（川田博士から贈られた）を、わたくしに複写して送ら

れたので、逝去後に入手披読することができた。末木氏の労に感謝する。以下、自伝的追想文の引用は、すべてこれによる。

(なかむら・はじめ)